

大分県道路トンネル定期点検要領(案)

(点検様式記入要領)

令和7年7月改定

様式番号	記録内容	
様式A-1	トンネル 台帳	トンネル諸元、非常用施設諸元
様式A-2		トンネル情報一覧表
様式A-3		トンネル記録(位置図、断面図、施工実績他)
様式B	定期点検 記録様式	トンネル変状・異常箇所写真位置図
様式C-1-1		全スパン定期点検結果総括表(トンネル本体工)
様式C-1-2		定期点検結果総括表(トンネル内附属物等の取付状態)
様式C-2		状態の把握の内容
様式D-1-1		変状写真台帳(トンネル本体工)
様式D-1-2		異常写真台帳(トンネル内附属物等の取付状態)
様式D-2-1		トンネル全体変状展開図
様式D-2-1'		トンネル全体変状展開図(機器の活用時)
様式D-3		覆工スパン別変状詳細展開図
様式E		近接目視による状態の把握が不可能な箇所
様式F		覆工スパン毎の変状数・変状規模の集計
様式G		健全性の診断の区分に関する所見

■トンネル台帳 トンネル諸元、非常用施設諸元 【様式A-1】

■トンネル台帳 トンネル諸元、非常用施設諸元 【様式A-1】												施設ID						
フリガナ 名称		路線名			管理者名			緊急輸送道路 代替路の有無										
所在地		自	作成者			作成年月日			トンネル延長 L=		m							
至								トンネルの分類										
起点	緯度	完成年月日			舗装	種別	施設の内訳		種別・方式	型式	個数	更新年度						
	経度	供用年月日				厚さ			通 報 設 備	通話型通報設備								
終点	緯度	トンネル区分				面積			操作型通報設備									
	経度	内装種類			更新年次	種別	自動通報設備											
一般有料区分		天井板種類			排水	更新年次	非常警報設備											
土かぶり		m				種別	消火器											
内空断面積		m ²			坑門	更新年次	消火栓設備											
交通量		台/日				起点	形式	誘導表示設備										
幅員	道路幅	m			竣工巻厚	延長	m	施設	種別・方式	個数	更新年次							
	車道幅	m				形式	延長	m	照明									
	歩道等幅	m				側壁	延長	m	換気									
	建築限界高	m				アーチ	延長	cm	標識									
高さ	中央高	m			半径	側壁	延長	cm	警報表示板									
	有効高	m				インバート	延長	cm	吸音板									
	縦断勾配					アーチ	延長	cm										
線形	直線区間長					占用物件	側壁	延長	cm									
	曲線区間	区間長					インバート	延長	cm									
		起点側クロソイド					種類	寸法	管理者名	更新年次								
		曲線半径																
	終点側クロソイド																	
トンネル工法																		
												トンネル非常用施設	通 報 設 備	通話型通報設備				
												トンネル非常用施設	非常警報設備					
													消火器					
												トンネル非常用施設	消火栓設備					
													誘導表示設備					
												トンネル非常用施設	避難誘導設備					
													避難通路					
												トンネル非常用施設	排煙設備					
													給水栓設備					
												トンネル非常用施設	無線通信補助設備					
													水噴霧設備					
												トンネル非常用施設	監視設備					
													予備発電設備					
												その他						
													非常駐車帯					
												その他	方向転換所					

※緯度・経度については、秒の小数第二位の単位まで記入すること。

トンネルの一般的な諸元には、道路区分・交通量・延長・内空断面、本体工の線形・幅員構成・掘削工法・覆工・坑門・舗装等に関する諸数値、付属施設の換気・照明・非常用施設に関する設備の設置台数等を整理する。

■トンネル台帳 トンネル記録（位置図、断面図、施工実績他）【様式A-3】

フリガナ 名称		路線名		作成者		作成年月日	
		管理者名					
位置図・現況写真・標準断面図・地質線断面図・施工実績							

トンネル記録には、位置図や現況写真(坑口写真)、断面図や縦断図を記録するとともに、工事中の記録として施工時に不良地山で特殊工法等を用いた箇所及び検討内容・工法等を記述する。

■定期点検記録様式 トンネル変状・異常箇所写真位置図 【様式B】										定期点検年月日		施設ID	
フリガナ 名称		路線名		管理番号		定期点検実施者		起点	緯度	終点	緯度		
所在地	目 至	トンネル工法		トンネル延長 L= m		自専道 or 一般道		代替路の有無					
トンネル毎の健全性の診断の区分		建設年度		幅員 L= m		緊急輸送道路		変状・異常箇所数合計		○ (応急措置後)			
		トンネル本体工		材質劣化 II	III	IV	附属物等の取付状態		×				
		漏水 II		III	IV								
		外力 II		III	IV								
トンネル変状・異常箇所写真位置図													
写真番号の記載例 本体工の変状：写真-【覆工スパン番号】-【変状番号】 附属物等の異常：写真-【覆工スパン番号】-【異常番号】				注1：本位置図は、見下げた状態で記載すること。 注2：覆工スパン番号は横断目地毎(矢板工法の場合は上半アーチの横断目地毎)に設定すること。				注3：写真番号に付する変状番号は、各覆工スパンの変状に対して新たに確認された場合は順次追加していくこと。 注4：横断目地の変状は前の覆工スパン番号で計上すること。 注5：1枚に収まらない場合は、複数枚に分けて作成すること。					

- ※1 トンネル本体工の変状数は、材質劣化、漏水に起因するものは変状単位で、外力に起因するものはスパン単位で計上すること。
 ※2 トンネル本体工の変状に対しては、措置の必要性（Ⅱ～Ⅳ）について表記すること。また、点検前に実施された措置によりⅠと判定された箇所についても記載すること。
 ※3 附属物等の取付状態の○欄については、応急措置前に判定区分×とした箇所のうち応急措置により○判定とした箇所の数を記入すること。
 ※4 附属物等の異常番号は、本体工と番号が重複しないよう101番以降とする等の配慮を行い、分かりやすく記録すること。

本様式は、施設毎の健全性の診断の区分（Ⅰ～Ⅳ）を記載する。また、変状毎に変状要因を3つに分類したうえでの措置の必要性（Ⅱ～Ⅳ）とトンネル内附属物等の取付状態の異常（○または×）を参考として記録する。なお、変状、異常の位置および写真番号をトンネルの構造を展開した位置図に記録するものである。

記入にあたっては、以下の点に留意する。

- トンネルの本体工の変状に対しては、変状現象の要因を以下の3つの区分（外力、材質劣化、漏水）に分類し、措置の必要性（Ⅱ～Ⅳ）を記録する。
 - 外力……トンネルの外部から作用する力であり、緩み土圧、偏土圧、地すべりによる土圧、膨張性土圧、水圧、凍上圧等の総称をいう。
 - 材質劣化……使用材料の品質や性能が低下するものであり、コンクリートの中酸化、アルカリ骨材反応、鋼材の腐食、凍害、塩害、温度収縮、乾燥収縮等の総称をいう。
 - 漏水……覆工背面地山等からの水が、トンネル坑内に流出することであり、覆工や路面の目地部、ひび割れ箇所等の水流出の総称をいう。
- トンネル本体工の変状数は、材質劣化、漏水に起因するものは変状単位で、外力に起因するものはスパン単位で計上する。
- 前回点検以降に、措置が行われた結果、Ⅰと判定された箇所についても記載する。
- 附属物等の取付状態の○欄については、応急措置前に判定区分×とした箇所のうち応急措置により○判定とした箇所の数を記入する。
- 附属物等の異常番号は、本体工と番号が重複しないよう101番以降とする等の配慮を行い、分かりやすく記録する。

また、トンネル変状・異常箇所写真位置図の記載にあたっては、以下の点に留意する。

- 本位置図は、見下げた状態で記載する。
- 覆工スパン番号は横断目地毎（矢板工法の場合は上半アーチの横断目地毎）に設定する。
- 写真番号に付する変状番号は、各覆工スパンの変状に対して新たに確認された場合は順次追加していく。
- 横断目地の変状は前の覆工スパン番号で計上する。
- 1枚に収まらない場合は、複数枚に分けて作成する。

トンネル施設の諸元についてトンネル台帳等のデータなどを活用して整理する。トンネルの諸元に関する記録は、以下の点に留意する。

「トンネル名」

道路トンネル名を記入する。英数字やカッコが入る場合には半角とする。上り線、下り線については「(上り)」「(下り)」とし、「(上)」「(上り線)」「上り」「上」は使用不可。トンネル名のフリガナ（半角カナ）を記入する。数字も半角カナとして、フリガナの前には半角カコを必ず入れる。

〈記入例〉

道路トンネル名	フリガナ
〇〇トンネル	(マルマルトンネル)
□隧道	(シカズ ^ゝ イ ^ゝ ウ)
△トンネル(上り)	(サンカクトンネル/ホリ)

「路線名」

以下の例に従い、路線名を記入する。（路線番号を記入する際には、必ず半角数字とする）。

〈記入例〉

路線名	記入例
高速自動車国道	〇〇自動車道 〇〇線 (高速自動車国道法上の路線名)
一般国道の自動車専用道路	国道〇号（〇〇道路） (一般国道という表記はしない)
高速自動車国道に並行する 一般国道の自動車専用道路	
地域高規格道路	
上記以外の国道	国道〇号

「管理者名」

以下の例に従い、管理者名を記入する。

〈記入例〉

〇〇地方整備局△△国道事務所□□維持出張所

「緯度・経度」

施設の起点側の緯度経度を「定期点検対象施設のID付与に関する参考資料（案）」（令和元年10月）に規定されている位置精度（十進緯度経度小数第5位）で記入する。

工事完成図書などで緯度経度情報が既知な場合は、上記に則り半角数字で記入する。緯度経度が未知な場合は、地図から取得する。

「施設ID」

施設IDは、緯度・経度を用いて、「定期点検対象施設のID付与に関する参考資料（案）」（令和元年10月）に示される以下の方法により付与するものとする。施設IDの付与は、緯度経度を0.01秒単位で取得し、十進緯度経度の小数第5位に丸め、表記は緯度（小数点を含む8桁）+緯度と経度を区分するカンマ（1桁）+経度（小数点を含む9桁）の18桁（半角）とする。なお、精度は概ね1m程度とする。仮に同じ緯度経度になる場合には、位置関係（東西南北）を考慮したうえで、緯度・経度をずらしてID番号を設定する。以下に施設IDの付与例を示す。

〈施設ID（番号）付与の例〉

表示形式：18桁番号「緯度（度単位）+，（カンマ）+経度（度単位）」

度分秒単位（変換）度単位

「dd. mm. ss」 → $dd+mm/60+ss/60/60$ = 十進緯度経度

北緯 43 度 10 分 54.00 秒

$43+10/60+54.00/60/60$ = 43.181666 → 丸め 43.18167

東経 141 度 19 分 32.00 秒

$141+19/60+32.00/60/60$ = 141.325555 → 丸め 141.32556

施設ID（18桁・半角） → 43.18167,141.32556

「所在地」

以下の例に従い、施設の起点側の所在地を記入する。なお、伝達の確実性の向上を目的として、フリガナを付すなどの工夫をするとよい。

〈記入例〉〇〇県△△市□□地先

「トンネル工法」

以下に示す一覧表から選択する。形式が複数存在する場合は、代表的な構造形式を選択する。トンネル工法が不明の場合は「不明」と記入し、空欄としないこと。

〈記入例〉

トンネル工法
山岳トンネル工法 (NATM)
矢板工法
開削工法
シールド工法
その他
不明

「建設年度」

建設年度を西暦 4 桁（半角数字）で記入する。（和暦は使わない。「年度」は不要。）建設年度が不明の場合は「不明」と記入し、空欄としないこと。

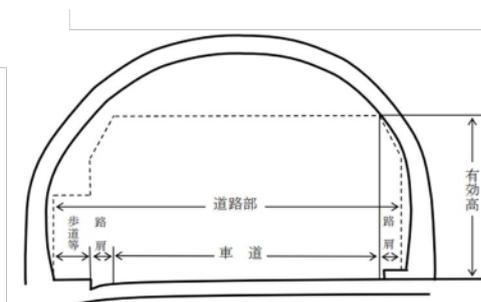
〈記入例〉1980

「トンネル延長」

トンネル延長（坑門（入口）から坑門（出口）までの距離）(m)を半角数字で記入する。小数点以下まで分かる場合は、小数点以下第 2 位を四捨五入して第 1 位まで記入する。

「幅員」

幅員(m)を半角数字で記入する。なお、ここでいう幅員は、車道、路肩及び歩道等を加えた幅員とする。小数点以下まで分かる場合は、小数点以下第 2 位を四捨五入して第 1 位まで記入する。



「自専道 or 一般道」

自専道か一般道を選択する。

自専道：道路法第 48 条第 2 項に定められる自動車専用道路

一般道：上記以外の道路

「代替路の有無」

代替路(災害時に地域の孤立化等を防ぐネットワークとして機能する道路)の有無を選択する。
判断基準として、当該トンネルが通行止めとなった場合に、孤立集落が発生する場合は、代替路は無しとする。

「緊急輸送道路」

当該道路橋の緊急輸送道路の指定状況について、「一次」、「二次」、「三次」、「市町村指定」、「指定無し」から選択する。

第 1 次緊急輸送道路：県庁所在地、地方中心都市及び重要港湾、空港などを連絡する道路

第 2 次緊急輸送道路：第 1 次緊急輸送道路と市町村役場、主要な防災拠点（行政機関、公共機関、主要駅、港湾、ヘリポート、災害医療拠点、自衛隊など）を連絡する道路

第 3 次緊急輸送道路：その他の道路

市町村指定：市町村が指定している緊急輸送道路

指定なし：上記のいずれにも該当しない道路

■定期点検記録様式 状態の把握の内容 【様式C-2】

フリガナ 名称	路線名		定期点検実施者	定期点検年月日		
	管理者名					
状態の把握の内容	覆工スパン 番号	変状 番号	状態の把握の内容			
			年月日	内容	結果	対策区分の 判定

注) 状態の把握において、微破壊・非破壊検査や各種試験等を実施した場合について記載する。

※ 行が不足する場合は、適時、表の行を増やすこと。

本様式は、定期点検により必要と判断して、実施した微破壊・非破壊検査等を記録するものである。

■定期点検記録様式 変状写真台帳【様式D-1-1】

定期点検実施者										施設ID	
フリガナ 名称			路線名							定期点検年月日	
			管理番号								
写真 番号	覆工スパン 番号		写真 番号	覆工スパン 番号		写真 番号	覆工スパン 番号		写真 番号	覆工スパン 番号	
	変状番号			変状番号			変状番号			変状番号	
変状 部位	対象箇所		変状 部位	対象箇所		変状 部位	対象箇所		変状 部位	対象箇所	
	部位区分			部位区分			部位区分			部位区分	
変状種類			変状種類			変状種類			変状種類		
対策 区分	変状区分		対策 区分	変状区分		対策 区分	変状区分		対策 区分	変状区分	
	応急措置前			応急措置前			応急措置前			応急措置前	
	応急措置後			応急措置後			応急措置後			応急措置後	
変状の発生範囲及び規模			前回変状の発生範囲及び規模			変状の発生範囲及び規模			前回変状の発生範囲及び規模		
対策履歴			実施状況(実施日)			対策履歴			実施状況(実施日)		
メモ						メモ					
写真 番号	覆工スパン 番号		写真 番号	覆工スパン 番号		写真 番号	覆工スパン 番号		写真 番号	覆工スパン 番号	
	変状番号			変状番号			変状番号			変状番号	
変状 部位	対象箇所		変状 部位	対象箇所		変状 部位	対象箇所		変状 部位	対象箇所	
	部位区分			部位区分			部位区分			部位区分	
変状種類			変状種類			変状種類			変状種類		
対策 区分	変状区分		対策 区分	変状区分		対策 区分	変状区分		対策 区分	変状区分	
	応急措置前			応急措置前			応急措置前			応急措置前	
	応急措置後			応急措置後			応急措置後			応急措置後	
変状の発生範囲及び規模			前回変状の発生範囲及び規模			変状の発生範囲及び規模			前回変状の発生範囲及び規模		
対策履歴			実施状況(実施日)			対策履歴			実施状況(実施日)		
メモ						メモ					

※ 応急措置後の対策区分について添付すること。また、点検前に実施された措置によりⅠと判定された箇所も添付すること。
 ※ たたき落としを実施した場合は、実施後の写真を添付すること。
 ※ 附属物の取付状態に関する異常写真は別途、任意の書式でとりまとめること。

※ 変状の発生範囲の規模とは、対策を行う際に参考となる変状の長さや面積をいう。
 ※ 応急措置を実施しないで決定した変状の対策区分は、対策区分の応急措置後の欄に記入すること。
 ※ 変状の発生範囲の規模は、面積・寸法を記載すること。(0は割れ線のmmとし、その他をm表記とする)
 ※ 構造用鋼材以外の異物に伴うき・はく離については、メモ欄に異物の概要を記入すること。

本様式は、対策区分の判定区分Ⅱb～Ⅳの変状または本対策が適用された対策区分の判定区分Ⅰの変状を抽出したうえで、変状箇所毎の写真をとりとまとめるものである。記入にあたっては、以下の点に留意する。

- ・ 応急措置後の対策区分の判定区分Ⅱb～Ⅳについて添付する。また、点検前に実施された措置によりⅠと判定された箇所も添付する。
- ・ たたき落としを実施した場合は、実施後の写真を添付する。
- ・ 変状部位における対象箇所、部位区分は付表-2.1、変状種類は付表-2.2をもとに入力する。

付表-2.1 対象箇所、部位区分一覧

対象箇所	部位区分
覆工	アーチ、側壁、横断目地、水平打ち継ぎ目、面壁・妻壁等、その他
坑門	面壁・妻壁等、その他
内装板	側壁、その他
天井板	車道側、ダクト側、その他
路面	車道、歩道、監査歩廊、側溝、その他
その他	その他

付表-2.2 変状種類一覧

変状種類
圧ざ、ひび割れ
うき・はく離
鋼材腐食
変形・移動
沈下
隆起
巻厚の不足または減少、背面空洞
補修・補強材の破損
漏水
滞水
土砂流出
その他

- ・対策区分は、点検・調査後の判定結果について、応急措置後に記載する。また、応急措置を実施した場合には、応急措置前、応急措置後の判定結果を記載する。
- ・応急措置を実施しないで判定した変状の対策区分は、対策区分の応急措置後の欄に記入する。
- ・変状の発生範囲の規模とは、対策を行う際に参考となる変状の長さや面積をいう。
- ・変状の発生範囲の規模は、面積・寸法を記載する。(ひび割れ幅のみ mm とし、その他を m 表記とする)
- ・構造用鋼材以外の異物に伴ううき・はく離については、メモ欄に異物の概要を記入する。

■定期点検記録様式 異常写真台帳（トンネル内附属物等の取付状態） 【様式D-1-2】

フリガナ 名称		路線名		定期点検実施者		定期点検年月日		
		管理者名						
覆工スパン番号	異常番号	覆工スパン番号	異常番号	覆工スパン番号	異常番号	覆工スパン番号	異常番号	
対象箇所	異常の種類		対象箇所	異常の種類		対象箇所	異常の種類	
部位区分			部位区分			部位区分		
異常判定区分	メモ		異常判定区分	メモ		異常判定区分	メモ	
覆工スパン番号	異常番号	覆工スパン番号	異常番号	覆工スパン番号	異常番号	覆工スパン番号	異常番号	
対象箇所	異常の種類		対象箇所	異常の種類		対象箇所	異常の種類	
部位区分			部位区分			部位区分		
異常判定区分	メモ		異常判定区分	メモ		異常判定区分	メモ	

※ 異常判定区分×について記入すること。また、応急措置前に異常判定区分×とした箇所のうち応急措置により○と判定した箇所も記入すること。
 ※ 応急措置を実施した場合は、その実施状況が分かる写真を添付すること。
 ※ 実状数に準じてシートを追加すること。

本様式は、異常箇所毎の写真をとりとまとめるものである。記入にあたっては、以下の点に留意する。

- ・異常判定区分×について記入すること。また、応急措置前に異常判定区分×とした箇所のうち応急措置により○と判定した箇所も記入する。
- ・応急措置を実施した場合は、その実施状況が分かる写真を添付する。
- ・対象箇所は付表-2.3、部位区分は付表-2.4をもとに入力する。
- ・また、異常種類は付表-2.5をもとに入力する

付表-2.3 対象箇所一覧

対象箇所	
照明施設	灯具
	ケーブル本体
	ケーブル本体以外
換気施設	ジェットファン
	VI計
	CO計
	風向風速計
	その他

対象箇所	
非常用施設	通話型通報設備
	操作型通報設備
	自動通報設備
	非常警報設備
	点滅灯
	音信号発生器
	消火器
	消火栓設備
	誘導表示施設
	避難情報提供設備
	排煙設備
	給水栓設備
	無線通信補助設備
	水噴霧設備
	監視設備
その他	
その他	標識
	天井板取付部材
	内装板取付部材
	吸音板取付部材
	その他

付表-2.4 部位区分一覧

部位区分
附属物本体
取付部材
ボルト・ナット, アンカー類

付表-2.5 異常種類一覧

異常種類
破断
緩み、脱落
亀裂
腐食
変形, 欠損
がたつき
その他

■定期点検記録様式 トンネル全体変状展開図【様式D-2-1】

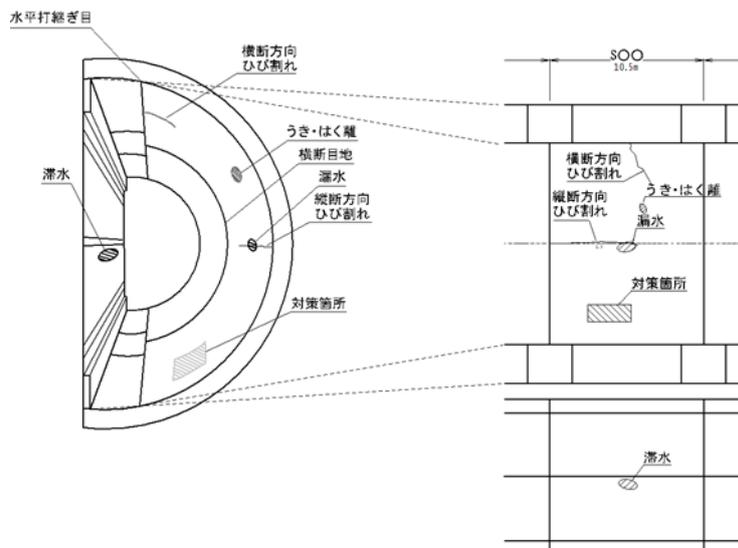
フリガナ 名称	路線名	定期点検実施者	定期点検年月日
	管理者名		
トンネル変状展開図	トンネル全体変状展開図		
	<p>注1:本展開図は、見下げた状態で記載すること。 注2:覆工スパン番号は横断目地毎(矢板工法の場合は上半アーチの横断目地毎)に設定すること。 注3:横断目地の変状は前の覆工スパン番号で計上すること。 注4:1枚に収まらない場合は、複数枚に分けて作成すること。</p>		

■定期点検記録様式 トンネル全体変状展開図(機器の活用時)【様式D-2-1'】

フリガナ 名称	路線名	定期点検実施者	定期点検年月日
	管理者名		
トンネル全体変状展開図			
トンネル変状展開図	注1:本展開図は、見下げた状態で記載すること。 注2:覆工スパン番号は横断目地毎(矢板工法の場合は上半アーチの横断目地毎)に設定すること。 注3:横断目地の変状は前の覆工スパン番号で計上すること。 注4:1枚に収まらない場合は、複数枚に分けて作成すること。		

本様式は、本体工に発生した変状の発生位置、規模、進行状況等を記録するものである。記入にあたっては、以下の点に留意する。

- ・本展開図は、見下げた状態で記載する。
- ・覆工スパン番号は横断目地毎（矢板工法の場合は上半アーチの横断目地毎）に設定する。
- ・覆工スパン番号の表記形式を3桁表示（例：S001）とする。
- ・横断目地の変状は前の覆工スパン番号で計上する。
- ・変状展開図の作成例を付図-2.1に、変状展開図の凡例の一例を付図-2.2に示す。



付図-2.1 変状展開図の作成例

凡 例

表 示	目視点検での変状種類	表 示	補修箇所の分類
	施工目地		漏水防止工（導水工）
	ひび割れ（0.3mm）未満		補修箇所（炭素繊維工等）
	ひび割れ（0.3mm）以上 数値はひび割れ開口幅（mm）		補修箇所（FRPメッシュ）
	段差 矢印側突出、数値は段差（mm）		補修箇所（内面補強工）
	コールドジョイント		補修箇所（鉄板）
	圧ざ		補修箇所（その他）
	うき、はく離 （ハンマー打診異常箇所）		ひび割れ注入補修
	はく落（はく落跡）	<p>ひび割れ深度方向の表示例</p> <p>（推定できるひび割れの方向）</p> <p>（表示方法）</p>	
	骨材の露出（豆板部）		
	漏水（漏水量 リットル/分）		
	漏水・にじみ（濡れている部分）		
	滞水、氷盤、沈砂 （〇〇厚さ cm）		
	溶脱物（遊離石灰など）		
	その他の変状		
	変状・移動・沈下		
	鋼材腐食		

付図-2.2 トンネル全体変状展開図の凡例の一例

■定期点検記録様式 覆工スパン別変状詳細展開図 【様式D-3】

フリガナ 名称	路線名		定期点検実施者		定期点検年月日		【健全性判定集計表】												
	管理者名						対策区分毎の変状の有無		対策区分毎の変状の発生範囲の規模(m ²)								備考 ^{※2}		
スパン別 変状展開図	スパン番号		スパン長		前回定期点検時の判定	応急措置前の判定	外力 ^{※1}				材質劣化 ^{※1}				漏水 ^{※1}				
	変状番号	対象箇所	部位区分	変状区分			変状種類	IV	III	IIa	IIb	IV	III	IIa	IIb	IV	III	IIa	
	1																		
	2																		
	3																		
	4																		
	5																		
	6																		
	7																		
	8																		
	9																		
	10																		
	11																		
	12																		
	13																		
	14																		
	15																		
	16																		
	17																		
	18																		
	19																		
	20																		
	21																		
	22																		
23																			
24																			
変状の発生規模合計(m ²)							—				—				覆工スパン単位の健全性の診断の区分				
集計判定診断	対策区分の判定結果		対策区分毎の変状数 ^{※3}				IV	III	IIa	IIb	IV	III	IIa	IIb		IV	III	IIa	IIb
所見	注1：誤記入防止のため、当該変状区分以外のセルは灰色表示とすること。 注2：応急措置を実施した場合は、その詳細を備考に記載すること。 注3：外力は覆工スパン単位、材質劣化、漏水は変状単位とすること。																		

(以下、印刷不要)

※1：本シートは作成洩れのないよう、変状が無くても全スパン分を作成すること。また変状展開図は、様式D-2-1、様式D-2-1'と同じものを覆工スパン単位で拡大し掲載すること。

※2：変状番号は、様式D-1-1で記入した番号と整合させること。

※3：対策区分毎の変状発生規模は、様式D-1-1に記載した面積を記入すること（ただし外力はスパン単位で評価するため変状の有無の欄には面積でなく○を記入し、備考欄に状況を記入）。

※4：本様式は覆工スパン毎に作成すること。

※5：変状数が多い場合は、適時、表の行を増やして覆工スパン毎に1枚のシートに収めること。また、1スパン1シートとし、スパンに合わせてシートを追加すること。

※6：対策区分毎の変状の発生範囲の規模とは、対策を行う際に参考となる変状の長さや面積であり、変状を包含する長さや面積とする。

※7：対策範囲を示す発生範囲の規模を面積で記入することが妥当ではない変状は、発生範囲の規模の欄に○を記入するとともに、備考に内容を記入すること。

本様式は、覆工スパン別に変状展開図を記載し、対策区分の判定結果を集計するものである。記入にあたっては、以下の点に留意する。

- 本シートは作成洩れのないよう、変状が無くても全スパン分を作成する。また変状展開図は、様式D-2-1、様式D-2-1'と同じものを覆工スパン単位で拡大し掲載する。
- 変状番号は、様式D-1-1で記入した番号と整合させる。
- 対策区分毎の変状発生規模は、様式D-1-1に記載した面積を記入する（ただし外力はスパン単位で評価するため変状の有無の欄には面積でなく○を記入し、備考欄に状況を記入）。
- 本様式は覆工スパン毎に作成する。
- 変状数が多い場合は、適時、表の行を増やして覆工スパン毎に1枚のシートに収める。また、1スパン1シートとし、スパンに合わせてシートを追加する。
- 対策区分毎の変状の発生範囲の規模とは、対策を行う際に参考となる変状の長さや面積であり、変状を包含する長さや面積とする。
- 対策範囲を示す発生範囲の規模を面積で記入することが妥当ではない変状は、発生範囲の規模の欄に○を記入するとともに、備考に内容を記入すること。
- 所見には、次回点検までに遭遇する状況を想定し、道路トンネルの構造等の特徴もふまえて、トンネルの構造物としての安全性や安定に及ぼす影響や利用者の安全性に及ぼす影響を推定した結果を記入する。

フリガナ				施設名		施設ID	
名称		管理番号		定期点検実施者		定期点検年月日	
道路トンネルの健全性の診断の区分の所見							

本様式は、様式 B の「健全性の診断の区分」にあたって考慮される予防保全の必要性の観点や健全性の診断の区分の前提条件を踏まえた所見を記録するためのものである。以下のように記録することを想定している。

所見には、「健全性の診断の区分」の決定に大きく関わる技術的見解について、措置に対する考え方との関連性がわかるように記載する。

一般には、以下の内容を含むとともに、これらの措置の必要性に関する技術的な評価から、次回定期点検までの措置に関する総合的な所見を記載することとなる。なお、規制や監視の実施を前提として健全性の診断の区分を行ったなど、考慮した前提条件や仮定がある場合には、それらについても記録する。

どのように「健全性の診断の区分」の決定に反映される措置の考え方が妥当なものとして導き出されるのかについて技術的見解などの根拠が記載されていることが特に重要である。

道路トンネルの構造物としての安全性や安定の推定にあたっては、道路トンネル定期点検要領「第2章 点検・診断 4. 技術的な評価と措置の必要性の検討」に基づき、記録する。

- 1) 変状・異常の内容とそれが確認された部材・部位（客観的事実）
 - ・技術的な評価の根拠となる点検で把握した状態（変状の種類・位置・性状）
- 2) 変状等の原因（推定）
 - ・変状の原因、進行の可能性の推定。その根拠として点検で把握した状態や参考にした情報
- 3) 施設の現状と次回定期点検まで及び将来における構造物の状態（推定）
 - ・道路トンネルの構造物としての安全性や安定の推定
 - ・該当する特定事象の状態も勘案した、予防保全の必要性や長寿命化の実現などの観点から経年的劣化に対する評価
 - ・道路利用者被害の発生の可能性
- 4) 措置の必要性の判断に関わる事項
 - ・道路トンネルの状態に関する技術的な観点での所見及び道路トンネルの置かれる状況も勘案して、健全性の診断の区分の決定に考慮された措置の必要性に関する技術的観点からの見解
 - ・措置の緊急性の有無
 - ・状態の把握により得た情報の精度に基づく構造物としての安全性や安定、耐久性などの見込

み違いの可能性など、詳細調査や追跡調査の必要性の有無

5) その他、次回定期点検へ引き継ぐ事項等

- ・措置や次回定期点検に向けて必要に応じて記録しておくのがよい事項等

【参考-記入例】

■定期点検記録様式 健全性の診断の区分に関する所見【様式G】

フリガナ					施設ID	
名称	●●トンネル	路線名	国道●●号	定期点検実施者	年月日	●●月●●日
●●トンネル	●●トンネル	管理者名	大分県●●事務所			
道路トンネルの健全性の診断の区分の所見						
<p>●●トンネルはNATM工法のトンネルである。</p> <p>(1) トンネル本体内 【健全性：Ⅱ】</p> <p>1) 覆工</p> <p>①ひび割れ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・側壁に一部最大開口幅5.0mmのひび割れが見られるが、延長も短く外力性の可能性は低い。その他は幅3.0mm未満の軽微なひび割れであった。⇒Ⅱb判定 <p>②うき、はく離、はく落</p> <ul style="list-style-type: none"> ・横断目地部、水平打ち継ぎ目にうきが見られ、水平打ち継ぎ目より上についてははく落した際に利用者被害の可能性があるので早期に対策することが望ましい。⇒Ⅱa判定 <p>③漏水</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アーチ部に滴水と側壁の一部に流下が見られたが、滴水により一部滞水がみられた、流下箇所については滞水は認められなかった。⇒Ⅱa判定 <p>2) 坑門工</p> <ul style="list-style-type: none"> ・顕著な変状は認められない。⇒Ⅰ判定 <p>3) 路面・路肩</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一部車道と監査歩廊に滞水が認められた。⇒Ⅱb判定 <p>(2) 附属物</p> <ul style="list-style-type: none"> ・消火栓と標識に腐食と欠損が複数みられた。⇒×判定 ・路面のデリネータの破損が複数みられた。⇒×判定 						